
本日も姫は、ナルシスト。

柊 シカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本日も姫は、ナルシスト。

【Nコード】

N3613I

【作者名】

柊 シカ

【あらすじ】

『ミナセケ』。それは、依頼があればほぼ何でもこなす万屋のこと。両親を若くして失った自称完璧人間：亜邪子は、頼れる下僕：狩屋や、愛する家族たちと共にちよつと黒い世の中を生きていくお話。

1：水無瀬家 「私が美しいからよ」（前書き）

『姫様はナルシスト』という小説をここで書いていたのですが
ログインできないため、新規に制作し直しました（。。（；）

1：水無瀬家 「私が美しいからよ」

「そろそろ、行って来る。」

西の空に陽が沈むころ、二人は私に背を向け部屋を後にする。
それは、私が見た両親の最期の姿だった。

1：水無瀬家

〈5年後〉

例えるなら社長室。

そんな場所で、私と彼はいつもの作業を行っていた。

「狩屋あゝ、今日の予定は？」

大量に積まれた資料に目を落しながら、私は隣で黙々と作業をする男に声をかけた。

なにせ、我が『ミナセケ』に舞い込んで来る依頼は山のごとく。
内容に目を通すだけでも一日かかる程の資料が届いてくるのよ。

お陰で毎日休む暇は無し。これでも20歳ぴっぴちの遊び盛りな
んだけどねえ……。

「ああ……そういうばあなたに依頼が一件来てますね。あと一時間でその仕事終わらせてください、あやこ亜邪子さん」

私は水無瀬亜邪子。

何をしても華麗にこなす、超 完璧人間。

パ テーンのCMに出れるくらいの腰まで伸びる艶やかな黒髪は、

すれ違う人々を振り返らせる。

…本当かって？

別に、部下達を常に大勢引き連れてるせいとかじゃないわよ？

私が美しいからよ。

家族（部下）達の中で「日本人形」とかほざいていた奴は、全員スマキの刑に処したわ。

二年前に水瀬家頭首になった私は、以来その役目を果たしている。父と母が残した”家族”と、この『ミナセケ』を守るためにね。

「……一時間?!」

思わず立ち上がる。

こいつは一体、何年私の下僕をしてると…「せめて身の回りの管理と言って下さい」

おっと幻聴が。

「亜邪子さん、今口に出てましたよ」

目をやると、心なしか呆れ顔の狩屋が書類をまとめていた。

この小生意気な男は狩屋夜雨^{かじせ}。通称狩屋。

猫っ毛の黒髪で、黒淵メガネがトレードマークのいたって普通の人間。

私が両親を失った時から、付き人のような役割をしている。

年は私と同じくらい。父がある日突然連れてきたこいつには、本当に謎が多い。

生年月日不詳・出身地不詳・生い立ち不詳・メガネは伊達なのか本当に悪いのか不詳。

挙げていたらきりが無いってわけ。

それでも、実力はこの私のお墨付きよ。

この世界で生きていくために必要な戦闘センスは……ま、

まあ、百歩譲ってこの私と同等って所かしら。

目の前の机に積まれている紙の山という現実を見る。

「あんたねえ、どうしてそういう大事な事をもっと早く言わないのよ！」

とてもそんな短時間で終わるはずがない量よねこれ。嫌がらせ？

仕方なく、再び資料を掴み取ると、カツアゲする勢いでそれとらみ合いを開始。

「?…何をそんなに怒ってるんですか。残りの作業は仕事が終わってからでも…」

「残業?!そんな落ちこぼれみたいな真似できるわけないでしょ！」

腰まで伸びた黒髪を、さらりとはらってみせる。

「私は、絶対・完全・完璧人間の水無瀬亜邪子様よ！」

高波を背負いどどんと言い放つ。

人類に私の横に出るものは誰一人としていないのよ。

しん…と静まり返った部屋には、狩屋の乾いた拍手が響いた。

「…三件不承認。あとは各階級毎ラシクに振り分けておいて

精根尽きた。とはこの事を言っんでしょね。

ばたりと床に倒れこみ、最終審査が終了したことを示す用紙を狩屋に手渡す。

ちなみに階級ランクというのは、依頼内容を難易度分けしたもののこと。その後、そのランクをこなせる『ミナセケ』の人間に仕事が行くシステムになってるわ。

そろそろ『ミナセケ』のことがわかってきたかしら？

「時間きっかり…流石ですね」

ニコニコしながら言う奴が憎らしい。一体誰のせいだと思っているのよ。

受け取った狩屋がドアへ手をかける。

「さあ、そろそろ行って来ましょう」

その光景に、”あの時”の影が重なる。

どくん、と胸がざわついた。

…なぜなら、狩屋があれを持っていたからだ。前にも見た事がある…あの時、私は……

「まさか、長時間移動と言う名の拷問が待ってたりとか…しないわよね？」

「車で4時間と言ったところですね」

やっぱりいいいいいい！！！！

狩屋が持っていたのは、車のキーだった。

床に寝転ぶと、衝撃の事実により急に睡魔が襲ってきた。

「狩屋…」

「なんでしよう？」

すでに半分夢の中と言った状態だった私は、その後情けない言葉を呟いた気がした。

「…おん…ぶ……」

ここで私の意識は途切れた。

「はぁ、仕方が無いですね。

……お疲れ様です、『姫』」

そこには、愛しいものを見つめるかのような眼差しがあったのかなんとか。

時は既に20時。

明かりが灯され華やかになる町並みに背を向け、私たちは狭く薄暗い路地裏に入る。

『今回の仕事は阿片窟あへんくつ掃除ですね』

阿片窟とは、アヘンを密売している場所の事を表す。

目を覚ました私は既に車内にいた。狩屋が運んだんでしょね。がっしりした体型でもないのに、どこからそんな力が出て来るんだか。

ふと窓の外見ると…

高速を高級車が一台、カーレースのように他の車を追い抜き爆走している。と、いうことがよくわかる光景が写った。

『ちよつと狩屋、法の定めた速度だけは守りなさいよ。……薬ヤクか…最近多いわね』

むくりと体を起こし、屈伸をする。

『しかし今回は少々わけアリでしてね。背後に権力者の影が見え隠れしてるって情報が』

『誰よ』

『それを調べる事も任務です。まあ、目星は付いてるんですけどね』
これ以上は聞くだけ無駄だと判断した私は、さてもう一寝入り。と、
後ろを振り返ったところ……

怪しげな物体が暗幕に包まれ、積まれていた。

『狩屋……？』

不審に思った私は、指を差しながら問う。

あ、と声を上げ、狩屋は坦々とした表情でこう告げた。

『それ、触らない方がいいですよ。』

…… 又ル又ルします』

又ル又ル?!

『は?…な、何言ってる…』

『激しくシヨツキングなので、亜邪子さんは見ない方が身の為かと』

あんた一体車に何乗せてんのよ……!!!!

ホラーと怪談が死ぬほど苦手な私は、それ以上の詮索をやめる事を
余儀なくされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3613i/>

本日も姫は、ナルシスト。

2010年12月25日15時15分発行